

# 寄り添う

## 外国由来の子どもたちと共に

自分の意志とは関係なく日本で生活することになった子どもたち。文化や考え方の違いと同時に彼らの前に立ちはだかるのは、「言葉の壁」です。

例えばひらがな。私たちは「あ」から「ん」まで、小さな子どもでも自然に唱えることができます。しかし、日本語を第二言語として学ぶ子どもたちにとっては「覚えなくてはいけないこと」です。

また日本語は一つの音に一つの文字が対応します。「あ」は「あ」と読むだけですが、英語はどうでしょう

うか。例えば「a」は「apple」「e」「pay」のように読み方が一つではありません。

## 言葉の「当たり前」を見直す

「サッカー」という言葉は「サ」「ッ」「カ」「ー」と四つの音と数えます。詰まる音(促音)や伸ばす音(長音)も一つの拍として数える

ことは、私たちにあっては当たり前のことです。しかし、日本語を学ぶ人たちにとっては「ッ」や「ー」を

一つの音として聞き取るのは、簡単ではありません。私たちが英語の「L」と「R」の発音を聞き分けるのが難しかったり、「watch」の綴りを習うまでは、「a」と「o」とちらを書くのかわからないことを考えれば、実感できるのでは

います。50音をメロディーに乗せて歌うことを覚えたT君は、時々つかえながらも、大きな声で楽しそうに歌っていました。ひらがなを勉強していたO君は、点や線を書き入れ輪郭を描き足して、文字を人の顔にしてみたい、ニヤツと笑いました。

子どもたちの言葉を身につけようとする姿は常識の枠にとらわれず時にとっても自由で、

ないでしょうか。耳慣れない音を正しく聞き取ることや聞いた音を正しく文字にすることは、とても難しいことなのです。

話せるようになるのも早いです。しかし、すぐ話せるようになっても後々困ることが起きてしまう場合もあります。それについては次回お伝えします。

そうはいつても特に低年齢で来日した子どもたちは、日本語を勉強することにあまり抵抗がないように思

(松本市子ども日本語教育センター コーディネーター・西尾淳)